

2019.7.16 正伯塾「ふなばし学講座」

藤由美

# 謎の長頸瓶「壺G」と 古代ムラの祈りの姿

～津田沼駅周辺の古代遺跡を含めて～



# プロローグ

2017年夏、殿内遺跡の発掘現場で、であった「壺G」



# 八千代市内遺跡の「壺G」





村上込の内遺跡














北海道遺跡

資料 I 壺G太型の型式変化 山中華「旧式佛の新式新構造」より

年代 型式	平城宮Ⅱ期 700年前後	平城宮Ⅴ期 770年前後	長岡京期 (784~794年)
	第Ⅰ型式	第Ⅱ型式	第Ⅲ型式
太 型	 平城宮	 平城宮  平城宮	 長岡京

## 壺G中太型・細型の型式変化

年代 型式	平城宮Ⅴ期 770年前後	長岡京期 (784~794年)	平安京前期 850年前後
	第Ⅰ型式		第Ⅱ型式
中 太 型	 平城宮	 長岡京  長岡京	
	 平城宮	 白山遺跡  長岡京	 花坂島遺跡  平城田原
細 型		 長岡京  長岡京  長岡京	

# 壺Gの用途は？



つぼしー  
『壺G』について

奈良時代中頃から平安時代初頭にかけての約100年しか作られなかった短命の壺です。平城京の発掘調査で発見され、命名された長頸壺(ちょうけいこ)の一種です。

その用途は、堅魚(かつお)の煮汁(にじ)の容器説・軍隊水筒説・花瓶(けびょう)(仏具)説等ありますが、まだ不明です。しかし畿内(きない)と東海・関東地方から集中して発見されることから、当時の政治動向に密接に関わっている壺と考えられています。

1. 堅魚(かつお)の煮汁の容器？
2. 東北へ派遣された兵士・官人の水筒？
3. 仏具の花瓶(けびょう)？

# 1. 堅魚煮汁の容器説 (1991 巽)



図3 漆運搬専用容器(左群)と堅魚煮汁運搬容器(右群)一平城京出土  
(奈良国立文化財研究所提供)



志太郡衙資料館展示例

都城で発見される地方の焼物

以上の焼物類とは別に、税物を入れた容器として運ばれてきた焼物がある。油・漆・堅魚煎汁など、液状の物資は容器に入れて運搬する必要がある、主として須恵器の壺類が考えられる。中身はすでに失われほとんど痕跡をとどめないもので、内容を決めるのはむずかしい。現在、収納物資と産地が推定できるものとして、図3右群の長頸瓶がある。この種の壺は、八世紀末から九世紀中ごろまで流行し、都城のみならず、関東・北陸地方でも発見されている。しかし、この壺は政府が指定する須恵器の貢進国では生産されていない。産地が確認されているのは、駿河国(東笠子)と伊豆国(花坂島橋窯)の二国である。「主計式」の規定や調の荷札木簡によってこの二国が堅魚煎汁の貢進国であることが明らかであり、煎汁の容器として運ばれてきたことが想定できる。なお、中男作物として貢進される堅魚煎汁の荷札では一升を単位に荷造りされている。

都の焼物の特質とその変容

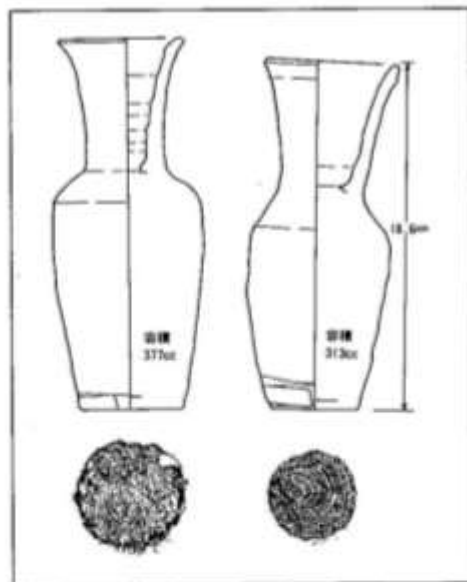
堅魚木簡に見られる堅魚などの実態について

瀬川 裕市郎

さて、平城宮跡の報告書で壺Gとされた瓶子について、その容量が4本ではほぼ1升到るとされる場合のあることや都城域からの出土の多いことなどから、これに堅魚煎汁を入れて都に貢納したとする考えもあるようである。現に昨年2月に行った壺Gを見る会の席上でも、この瓶子は堅魚汁を入れたものと断定的におっしゃる方もおられた。その席上でも壺Gの用途については、これといった結論めいたものは出なかったと思うが、中には慎重な方もおられて、さらに類例を増やすことや生産地、遺跡の中での出土位置など細かな検討も必要とするという意見もあったように思う。

私はこの壺Gを見る会が開かれる以前から、必ずしも堅魚煎汁には液体を入れるという意味での容器は不必要ではないかと考えていた。それは漁師さんからうかがって、堅魚煎汁は煮詰めればゼリー状になるということを承知していたし、自分自身の行った実験でもそれはゼリー状となったので、液体にこだわることはないと感じていたからである。それと壺Gに堅魚煎汁を入れたと断定的におっしゃった方も、壺Gがそのための専用容器とは考えてはおられず、その用途の一つに堅魚煎汁があったということに違いないと思っていたので、そのへんはかなり幅をもって考えていた。

それでは堅魚煎汁を入れた容器は何かといえば、最も可能性のあるものとして、先に見た薩摩の例にならって木製の容器を考えておこうと思う。以前は竹筒や藁に包んでも輸送できるなどと考えたが、明治時代のこととはいえ、実際に薩摩では藩への貢納にあたって、樽や桶を使っていた。



藤井原遺跡(右)と御幸町遺跡の壺G

「桓武朝の新流通構造：壺Gの生産と流通」

山中章 1997 『古代文化』 第49巻11号

長頸壺Gは東国からの衛士の必需品（水筒）として長岡京へ、一方で東国から徴発された兵士の携帯用水筒として東北へ、また、中央からの命令を伝える官人の携帯品として各国府へ、持ち込まれたのではなかろうか。長頸壺Gは、国府でも、城柵でも、そして長岡京でも、中心施設からは出土していない。つまり、皇族や高級官僚の用いる高級品ではなかった。



第3図 壺G出土地分布図（地域境界は都道府県境）

## 2. 東北派遣の兵士水筒説 (1997 山中)

## 2-2. 東北遠征説による展示例 (2007 国立歴博企画展)

資料 5

国立歴史民俗博物館昭和19年度企画展示「長岡京遷都—桓武と激動の時代」から



壺G 多賀城市教育委員会蔵 多賀城跡出土

須恵器長頸壺。長岡京から集中的に出土する特異な製品。伊豆国三島に所在する花坂はなざか鳥橋窯しまばしやう及び駿河国藤枝の助宗窯すけむねやうで生産されたことが知られる。ほかに武蔵国鳩山窯ほとやまやうでの生産の可能性も高く、東国一円で使用されていた。また東北の城柵遺跡からも量的には少ないが発見例が知られる。桓武朝における東北遠征の軍事行動にともなって、東国での使用例が参考にされて利用されるようになったものか。若干の型式変化を経て9世紀前半まで使用される。

平成19年度 企画展示

### 長岡京遷都

— 桓武と激動の時代 —

会期 平成19年10月10日(水)～12月2日(日) 入館料 大人500円 国立歴史民俗博物館

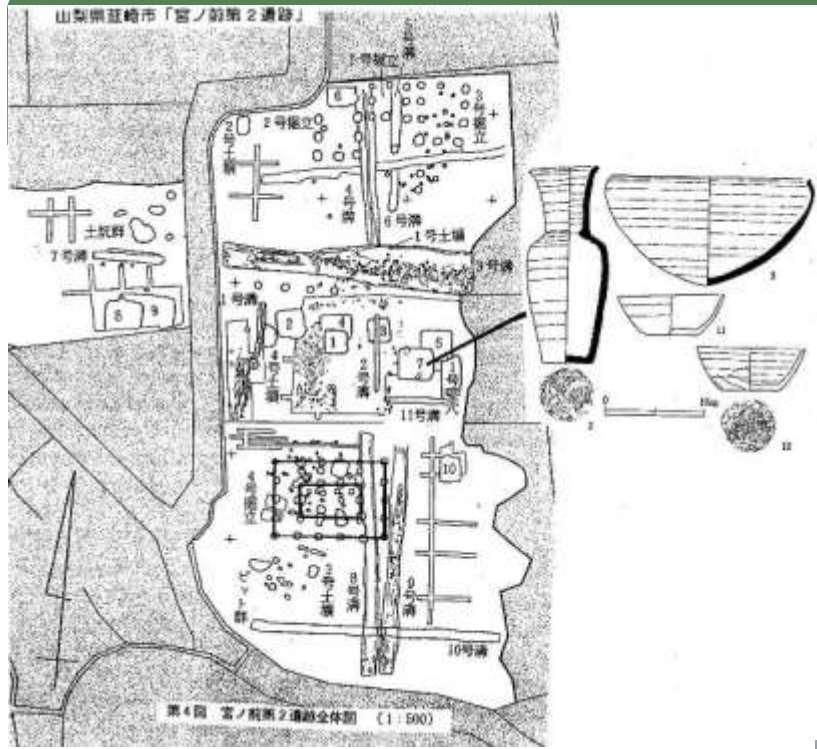


佐倉市教育委員会蔵  
酒々井町教育委員会蔵

各地出土の壺G



### 3. 仏具の花瓶説 (1998 佐野)



1. 観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺の変遷が関連する  
⇒仏の手を離れ、花活けの花瓶となった
2. 出土遺跡の性格 = 集落内の「寺」やお堂



「集落内の仏堂」(粉河寺縁起絵巻)



観音像の持つ花瓶 道明寺(大阪)



海住山寺(京都)



霊山寺(奈良)

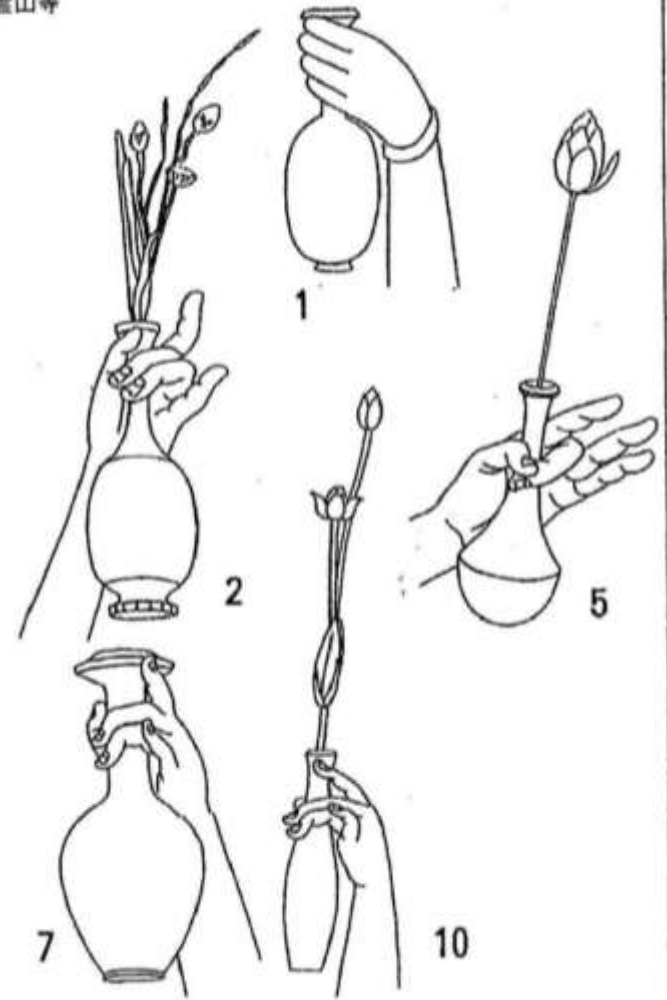
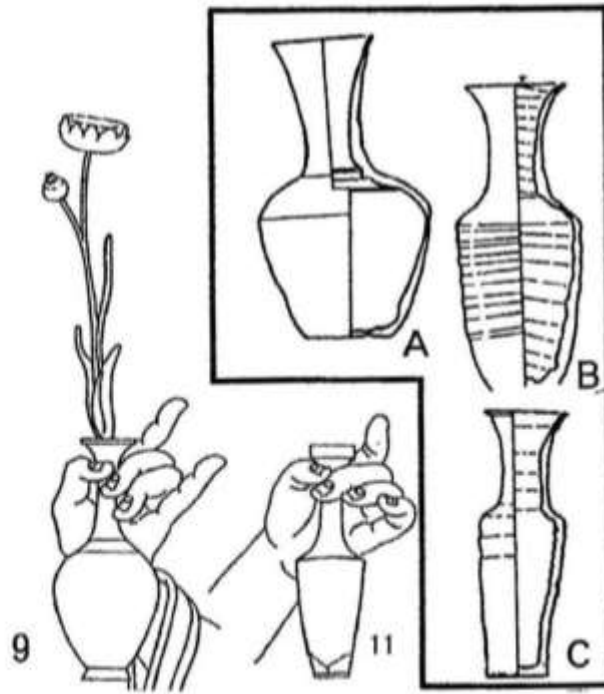
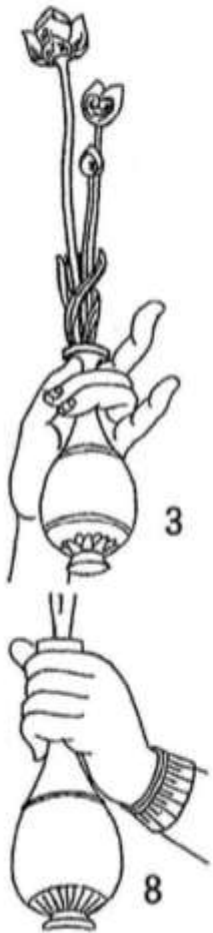
## 3-2 観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺の変遷

### 資料 6

#### 仏像の持つ花瓶と壺G

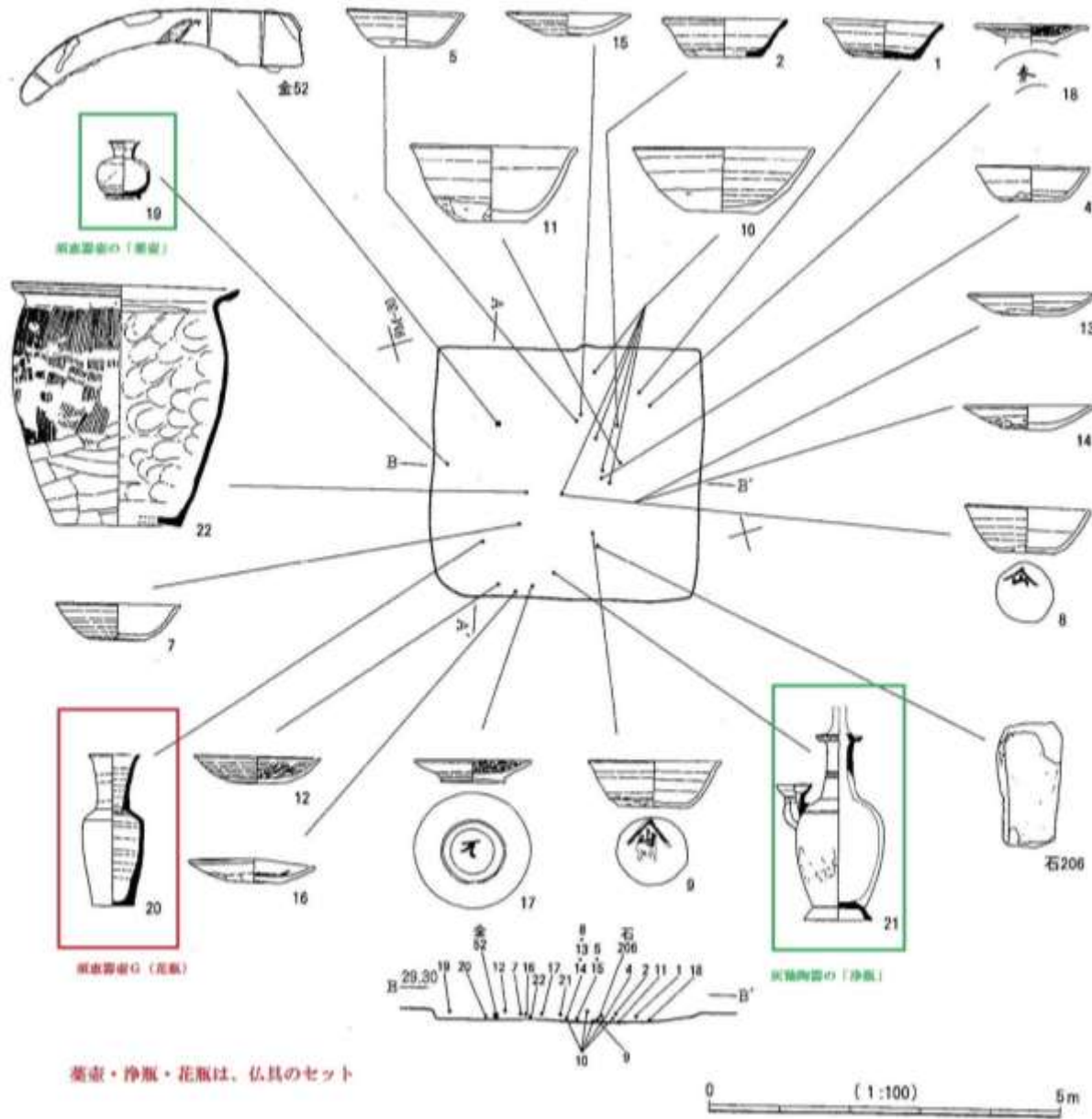
(「古代花瓶の変遷」佐野五十三氏作図を一部改編)

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1 九面観音像 奈良・法隆寺    | 11 十一面観音像 奈良・雲山寺 |
| 2 十一面観音像 奈良・聖林寺   | A 平城京            |
| 3 十一面観音像 京都・観音寺   | B・C 長岡京          |
| 4 十一面観音像 奈良・薬師寺   |                  |
| 5 十一面観音像 岐阜・美江寺   |                  |
| 6 十一面観音像 奈良・大安寺   |                  |
| 7 十一面観音像 滋賀・向源寺   |                  |
| 8 十一面観音像 滋賀・充滿寺   |                  |
| 9 十一面観音像 奈良・法輪寺   |                  |
| 10 十一面観音像 京都・海住山寺 |                  |



7  
C  
8  
C  
9  
C

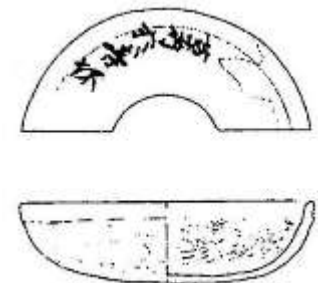
# 壺Gが出土した遺構例 -1.



## 草刈遺跡(千葉市千原台)の出土遺物

←住居跡の「壺G」との共伴例  
(薬壺・浄瓶・花瓶の仏具セット)

↓「草刈於寺坏」銘の土師器坏



第92図 K370住居

# 壺Gが出土した遺構例 -2.

## 印内台遺跡(船橋市)



船橋市印内台遺跡群 時期別竪穴住居跡分布と7・8世紀の主要遺物

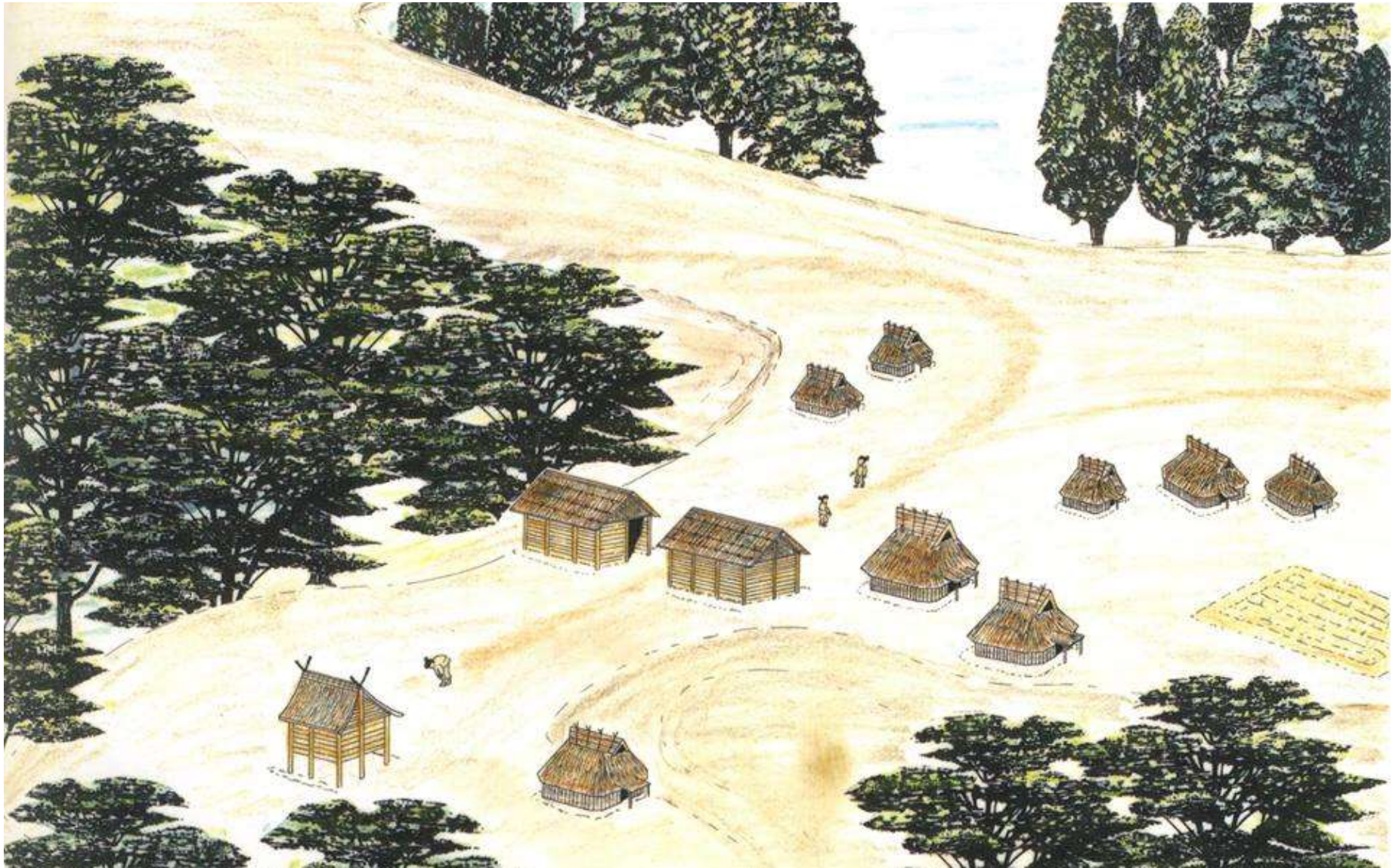


(船橋市郷土資料館にて(2007.12.22撮影))

左図の出典：船橋市の公式HP「船橋の遺跡説明板」から  
 8.西船3丁目公園(西船3-425-16) 印内台遺跡群1・2・43次調査地点  
 (図の初出は『市川市史 下総国戸籍 遺跡編』「船橋市域の遺跡」道上)

### 壺Gが出土した遺構例 -3.

「壺G」が2個出土した 白井屋敷跡遺跡 (佐倉市) の平安時代推定復元図 (画・林田利之)



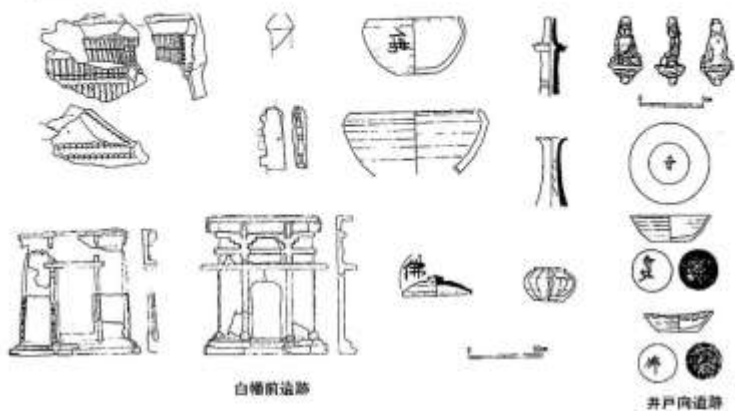
# 壺Gが出土した遺構例 -4.

八千代市村上と萱田の空中写真（1984年 国土交通省）



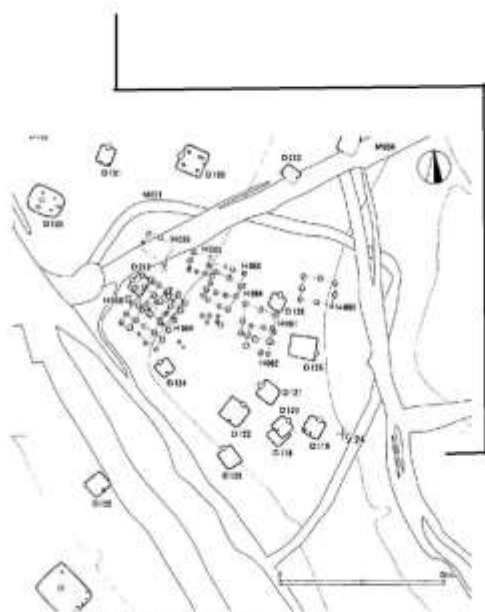
# 壺Gが出土した遺構例 -5.

## 資料 8



白樺前遺跡

萱田遺跡群出土の仏教関連遺物



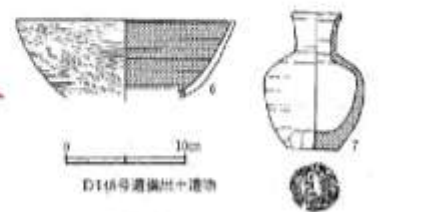
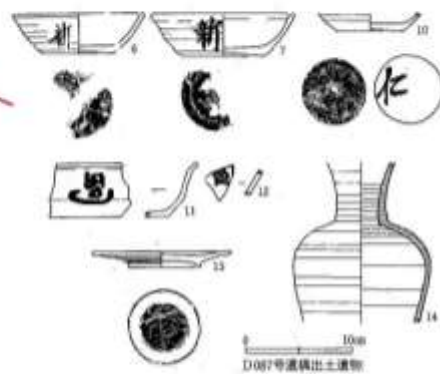
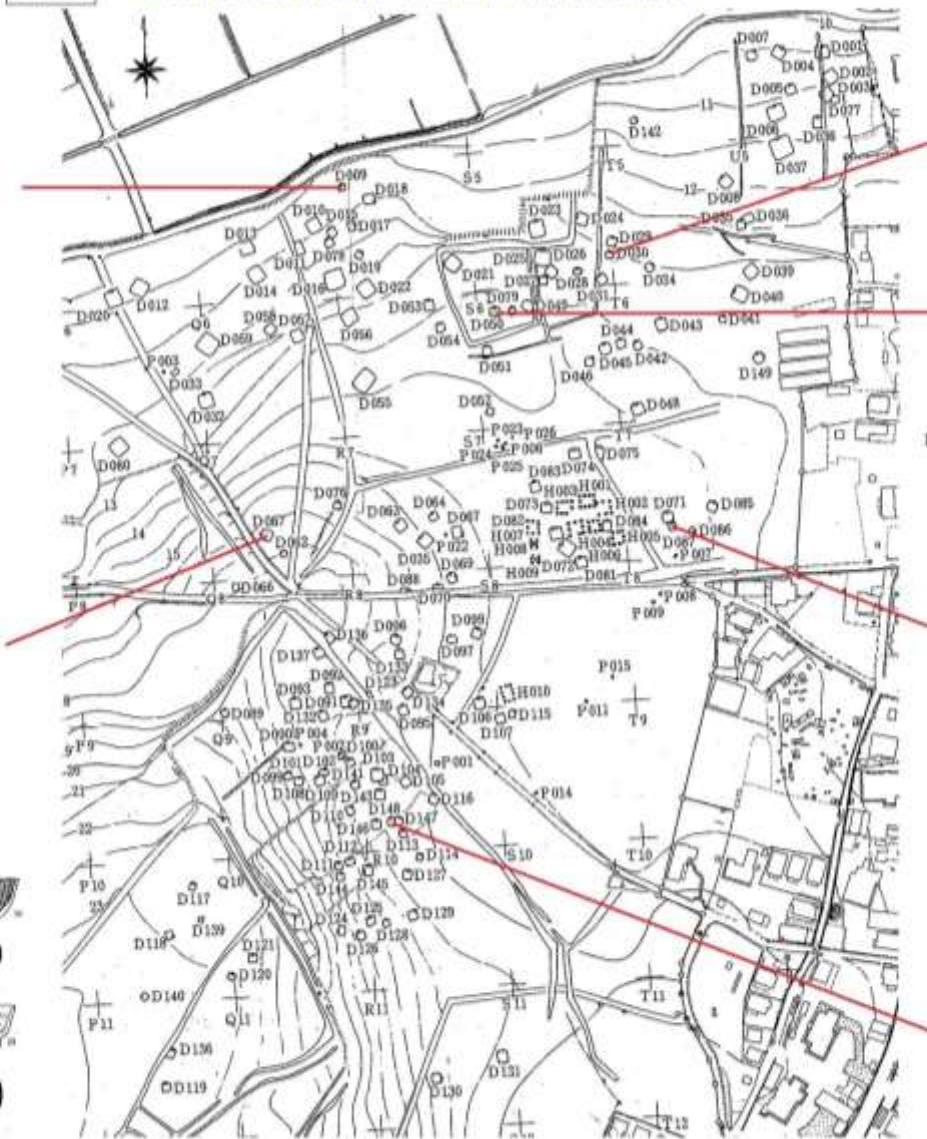
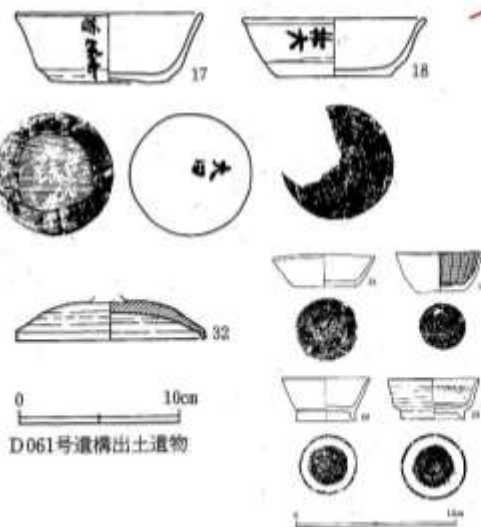
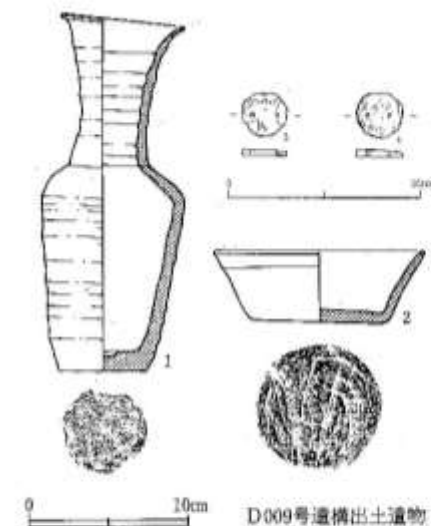
白樺前遺跡 2群A南ブロック



萱田遺跡群の遺跡と単位集団の配置







# 壺Gが出土した遺構例 -6.

村上込の内遺跡のジオラマ (国立歴史民俗博物館の展示に加筆)



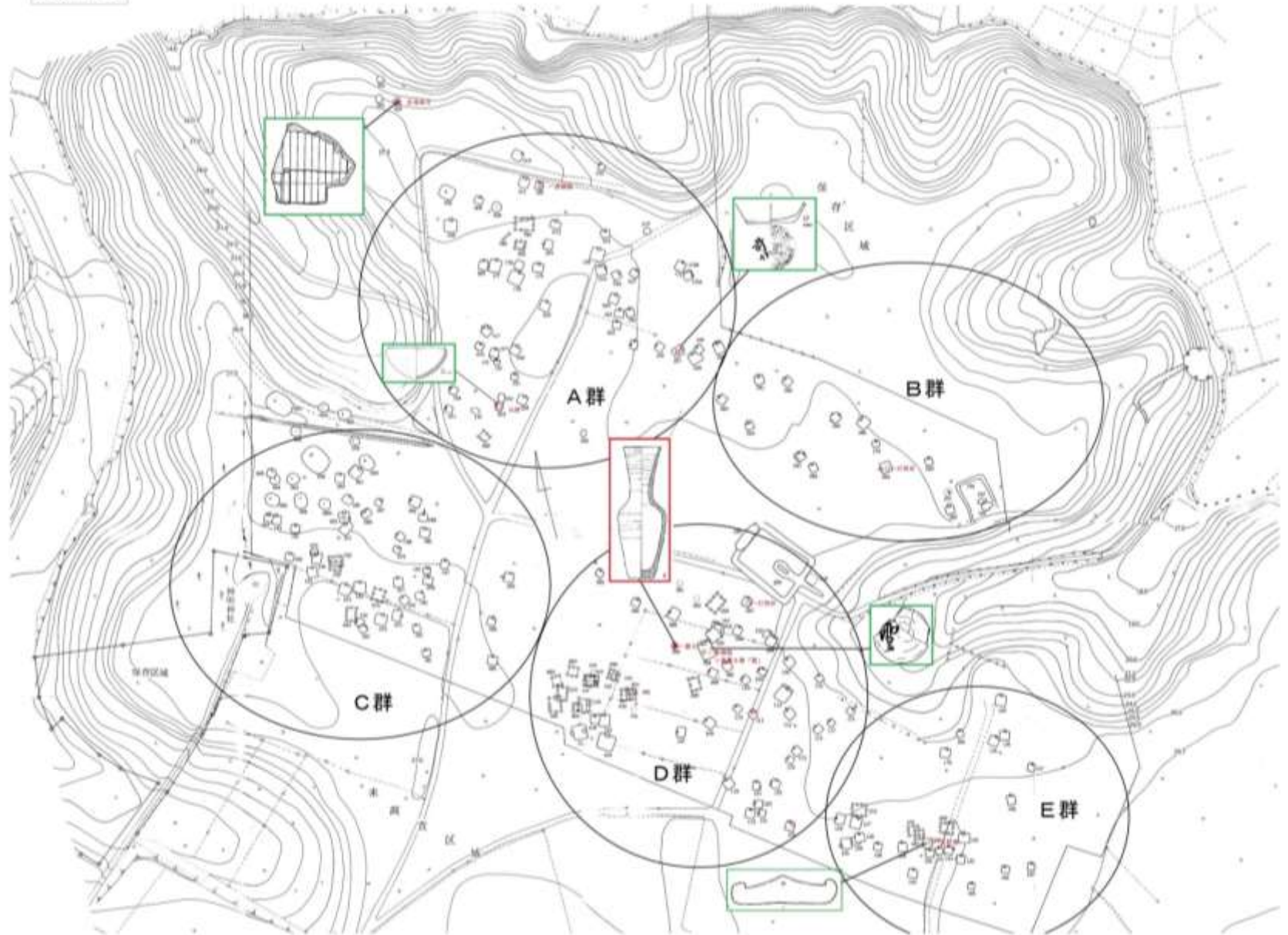
遺跡から出土した仏教関連遺物と「壺G」



# 壺Gが出土した遺構例 -6-2.

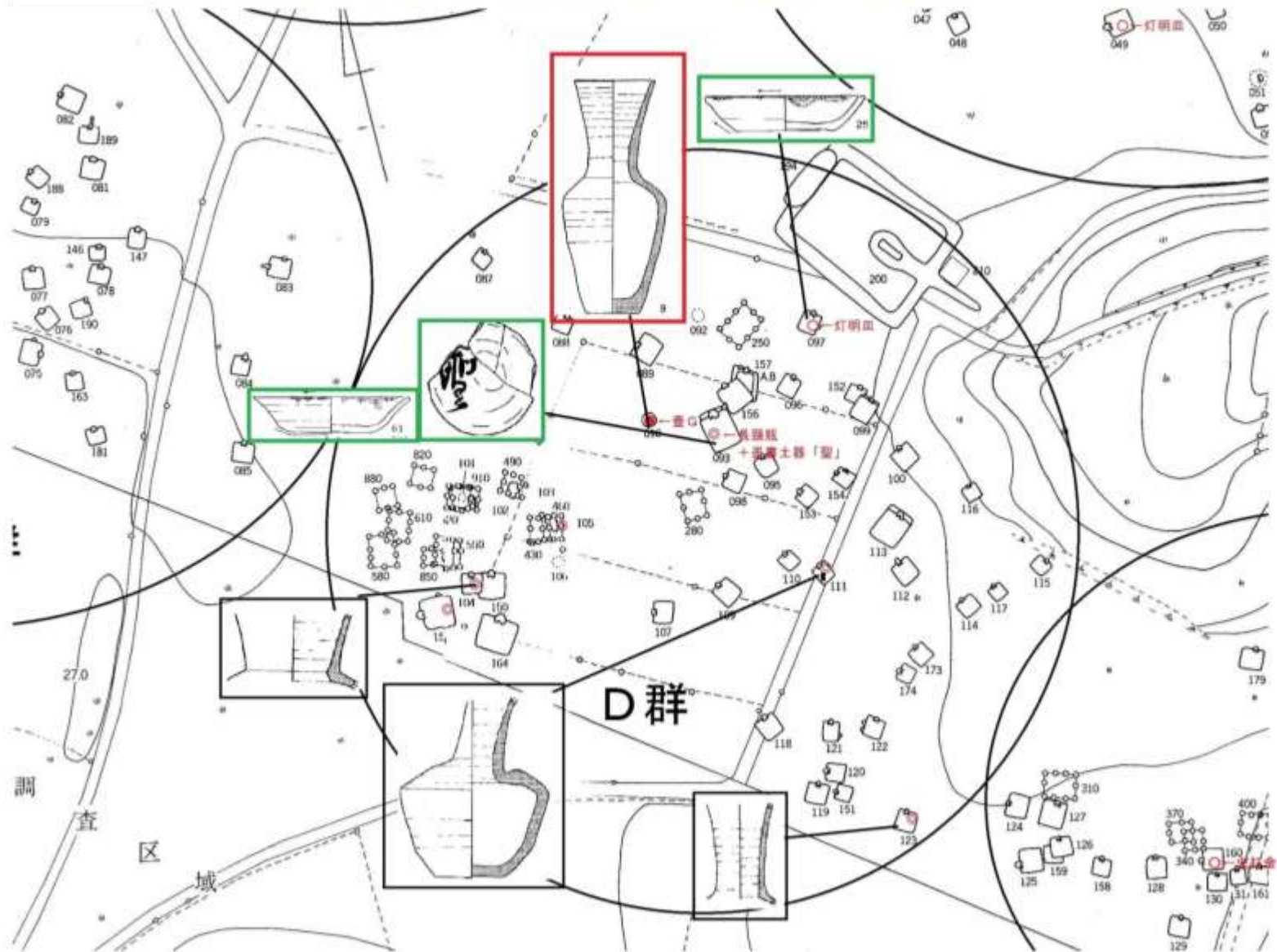
資料 9

村上込の内遺跡の遺構配置図



資料 10

村上込の内遺跡D群の遺構と遺物



## 谷津貝塚 (習志野市)

津田沼駅南側(奏の杜一丁目~三丁目、谷津一丁目・五丁目の一部)



# 奈良時代・平安時代の集落 しゅうらく

谷津貝塚では、奈良時代～平安時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡が多数発見されました。堅穴住居跡447軒、掘立柱建物跡237棟にのぼります（同一場所での建て替え・増築などは除く）。これは、7世紀末から10世紀前半にかけての二百数十年間に作られた建物跡の総数ですから、例えば9世紀のある時点にこれだけの建物があったというわけではありませんが、大規模な集落であるといえます。

千葉県北部の東京湾岸沿いの各台地には、古墳時代後期から奈良・平安時代に大規模な集落がそれぞれ存在していました。船橋市の夏見台遺跡・印内台遺跡・東中山台遺跡が代表的なものです。下総国府（市川市）と上総国府（市原市）を結ぶ古代東海道が通っていた交通上の重要地であり、谷津貝塚もそのような拠点的な集落の一つだったと考えられます。

谷津貝塚の集落は、7世紀末に開発されました。海に面する台地上に立地しており、農耕と漁撈が行われていました。さらに、ウシの飼育も行われていたようです。帯金具や皇朝銭など、役所に関わる人間とのつながりも見られます。9世紀前半には集落は最盛期を迎え、鍛冶工房を伴う大型の掘立柱建物群が建ち並びます。大量の土器が投棄される祭祀的な饗宴も行われていたようです。集落は10世紀前半に急激に縮小し、10世紀後半には消滅しました。

## 壺Gが出土した遺構例 -7



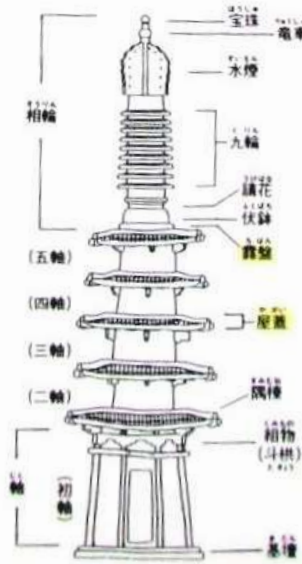
X-22b地点 S1-567 須恵器長頸壺出土状況

# 壺Gが出土した遺構例 -7.



3-22a地点 竪立柱建物跡群

## 谷津貝塚 2014.1.24展示会にて



部位名特図 (駒宮・葦野1994より)  
(例) 東山遺跡瓦塔



# 壺Gが出土した遺構例 -7-2

谷津貝塚 2017.7.18展示会にて





## 運搬用具？食器？仏具？ ～くびの長い「長頸壺」～

谷津貝塚では、「長頸壺（壺G<sup>1</sup>）」と呼ばれる、「壺」のカタチをした須恵器も出土しています。頸部と胴部が細長く、無台の平底で底部は糸切り痕（ロクロ台から糸で切り離した跡）がそのまま残っています。こうした形の壺は日本各地で出土しており、しかも8世紀末から9世紀初頭という非常に限定された時期の遺構から多く出ています。この壺は一体何に用いられていたのでしょうか？

その用途については諸説あります。まず、「堅魚煎汁」を運搬した容器であるという説です。この種の壺は助宗古窯や花坂島橋窯など静岡県内の諸窯で比較的多く生産されており、同地域が堅魚煎汁の貢進国であることから、煎汁の運搬容器として用いられたと想定するものです。ただ、堅魚煎汁は煮詰めるとゼリー状になるらしく、必ずしも袋物の容器に入れる必要はなかったとの指摘もあります。

ほかに東北遠征に向かう東国兵士の携帯用水筒であったとか、酒を入れる徳利のようなものであったといった説もありますが、もう一つ有力な説に仏具として使用された「花瓶」であったとする説があります。仏像の持つ花瓶の中に、壺Gと似たカタチの花瓶があり、壺Gが盛行する時期と壺Gと似た花瓶を持つ仏像が作られる時期とが一致するというのが大きな根拠です（写真1）。古代仏教が地方へ波及するのに伴って、寺院などで供えられたのだと考えられています。

谷津貝塚で出土した須恵器長頸壺（壺G）は、やはり8世紀末～9世紀初頭ごろに位置づけられ、従来の説と矛盾していません。同じ遺構から出土した土師器坏は内面に「油煙」と呼ばれる、灯明具として用いた際の燃えた痕跡（灯芯痕）が残っており、何らかの仏教祭祀が行われた可能性があります（写真2・3）。南に60～70m離れた地点からは「中村寺」と書かれた墨書土器も出土しており、関連性がうかがえます。ただし、当時は現在ほど物資に恵まれておらず、モノの転用・再利用も頻繁に行われていた時代ですから、幅広い利用・用途を念頭に置くべきかもしれません。（注1・「壺G」という名称は奈良文化財研究所の分類によります。）



写真1  
仏像の持つ花瓶  
（大阪・道明寺十一面観音立像、奈良国立博物館「特別展増像」1991）

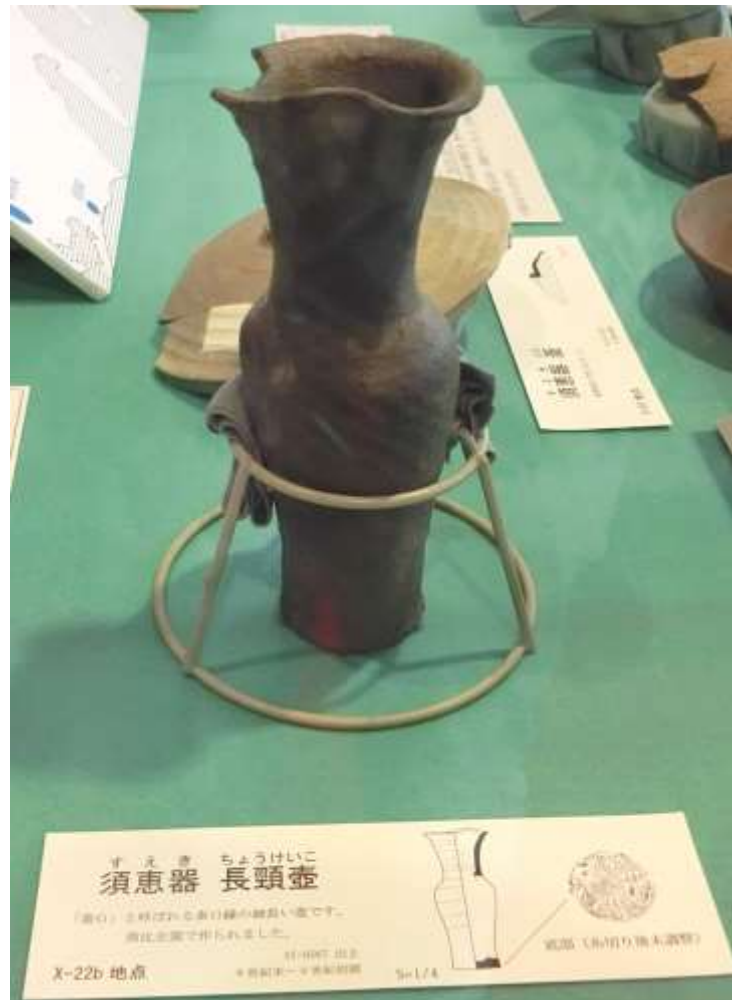


写真2  
油煙の残る土師器坏  
（X-22b SI-0567 出土）



写真3  
油煙の残る環で、灯明具として使われたと考えられます。体部はU字形に打ち欠かれています。  
（X-22b SI-0567 出土）

## 壺Gが出土した遺構例 -7-2



す え き ちようけいこ  
須恵器 長頸壺

「壺G」は口径と高さの比が約1:1.5程度です。南に60m離れた地点で出土しました。

SI-1097 出土

※複製禁止・複製不可

X-22b 地点

S=1/4



断面（右向き）

# まとめ

1. 壺Gは、密栓しづらい口の形、内容量、器の重さなどから、運搬用容器には適さない。

2. 観音像の持つ花瓶と須恵器壺の変遷の中で、壺Gの形が古代花瓶の形態に類似する。

3. 壺Gの出土遺跡からは、仏教に関連する遺物（「寺」「仏」などの墨書土器・浄瓶・香炉・灯明皿・瓦塔・仏鉢・火打金・三彩壺・小仏像など）も検出されている。

4. 8世紀後半～9世紀は、東国開発と民衆レベルの仏教の急激な拡大の時期で、壺Gの分布に一致する。

以上から、壺Gは仏に供える花瓶である。  
⇒古代集落遺跡の性格が再検討されるべき。

